

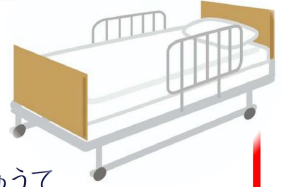


今月のことば 令和3年(2021)4月 <No.176>

最後はむなしい人生になる？

今月は滋賀県にある真宗大谷派の寺院、玄照寺住職・瓜生崇さんの著書から。在家出身の瓜生さんがまだお寺に入られる前のこと。病床の父との別れを赤裸々に語っておられます。

ボロボロ涙を流しながら、「つまらん人生だった、つまらん人生だった」って言うんですよ。それで泣くんですよ。もう遅くなっていましたから、「明日仕事があるから、俺はもう帰らなアカン、お父さんじゃあね」っていうふうに言うたら、「行かないでくれ」って、また手を握るんですわ。それでも、悲しゅうてその場に居てやれんかったもんですから、やっぱり手を振りほどいて帰った。それが父親と話をした最後だったんですね。...



私は思いました。人間って、どうやっても一人ぼっちなんだなって。実の息子でも、明日仕事があるからって言って、臨終に帰っちゃうんです。それは私のことです。何てひどいことをしてしまったんだろうと思いますけれども、きっと私も、死ぬときはこうなるだろうと思いました。...こうやって一生懸命岩を持ち上げて、それは必ず落ちていくんだって。積み上げてきたものは必ず全部崩れるんだと。そうなったならば、どれだけ一生懸命に頑張ってきた、最後はむなしい人生になるしかないじゃないかと。

『さよなら親鸞会 ～脱会から再び念仏に出会うまで～』 瓜生 崇 著 より

親鸞聖人は『高僧和讃』のなかで、「本願力にあいぬれば、むなしくすぐるひとぞなき」と言われています。阿弥陀如来の本願力に遇えば、決してむなしい人生にはならないという意味です。

「阿弥陀如来の本願力に会う」とはどういうことか？ 瓜生さんは様々な場所に出かけて行っでは、ひたすらお念仏の教えを聞きつづけました。そして一つ、分かったことがありました。

ずっと如来様は私に対して、「心配ないよ」って言うてくださっていた。心配ないよってことは、間違いのない信心を頂いて、確かな私になって、その確かな私を救うって言うてるんじゃないんです。フニャフニャの私を救うって言うてはるんですよ。...一生懸命進んだ先にあるんじゃないんです。今この身、このまま、今ですよ。救いは未来にあるんじゃないんです。昔にあるんでもないんです。私の今にあるんです。今が救われるということは、私の過去も現在も未来も、みんな如来様に認めていただけるということなんです。

失ったように見えた人生の一時も、すべて南無阿弥陀仏の中の出来事であったということです。取り戻す必要なんてなかったのです。



如来様の「心配ないよ」という声が、「南無阿弥陀仏」のお念仏です。私たちは、ただ「南無阿弥陀仏」のいわれを聞くだけです。“フニャフニャの私”のまま生き・死んでいくその人生が、決してむなしいものではなかったことを聞いていくのです。どうぞ、ご聴聞されてください。

慧日山 真光寺